

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起 およびアグレッションの方向との関連性について

The Relationship between Attachment Styles and Occurrence of Emotions, Directions of Aggression in Frustration Situations

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

鈴木 佳子

Yoshiko Suzuki

I. 先行研究のレビュー

1. 愛着理論

愛着とは、一般的に個人が特定の他者との間に結ぶ緊密な情緒的絆であるとされる。イギリスの精神科医の Bowlby (1969) が提唱した概念であり、アタッチメント (attachment) という語の日本語訳である。愛着の原義として Bowlby は、個体がある危機的状況に接し、あるいはまた、そうした危機を予知し、恐れや不安の情動が強く喚起された時に、特定の他個体への近接を通して、主観的な安全の感覚 (felt security) を回復・維持しようとする傾性をアタッチメントと呼んだのである (数井・遠藤、2005)。また、Bowlby は、内的作業モデル (Internal Working Model、以下 IWM) という概念を提唱し、愛着行動の個人差、その連続性、一貫性を説明しようとした。IWM とは、生後 6 ヶ月頃から 5 歳頃までの早期の愛着経験を基に構築した心的な表象、主観的な評価、内在化されたイメージである (初塚 2009)。この IWM は特定の愛着対象との関係だけでなく、その後の人生において関わる他者との関係性においても一般化されると Bowlby は考えたのである。

2. 成人の愛着理論

Bowlby は、愛着を個体が自律性を獲得した後であっても生涯を通して持続すると仮定したが、青年期、成人期においても、アタッチメントの特徴である近接欲求、分離不安、そして安全基地、安全な避難所としての役割を、養育者との関係、友人関係、夫婦関係、恋愛関係、などの関係においてみることができる。

青年期、成人期における愛着研究は、大きく 2 つに分けられる。一つは、過去の親との関係に焦点を当てた研究である。Main & Solomon (1990) は、成人の愛着の質 (愛着スタイル) を測定するために、アダルト・アタッチメント・インタビュー (Adult Attachment Interview、以下 AAI) を開発した。AAI を使った研究によると、成人の愛着スタイルは、F タイプ (安定・自律型)、Ds タイプ (愛

着軽視型)、Eタイプ(とらわれ型)、Uタイプ(未解決型)の4つの類型に分類される。

成人の愛着研究においてのもう一つの流れとして、現在の親友や恋人、あるいは配偶者等との関係性に着目した研究がある。Hazan & Shaver (1987) は、Ainsworth の幼児の3つの愛着分類を成人の恋愛に適合させて、3つの愛着スタイル(安定型・回避型・アンビバレント型)を測定する愛着スタイル質問紙(Attachment Style Questionnaires)を開発した。その後、Bartholomew & Horowitz (1990) が、愛着スタイルを4分類するRQ尺度(すなわち、安定型・とらわれ型・愛着軽視型・恐れ型)を作成した。これは、愛着のIWMは、自己に関するモデル(自分は他者から援助的に対応してくれる存在であるのかどうか)と他者に関するモデル(他者は自分が援助を求めているときにすぐに助けてくれるか)の2つの要素により形成されるという、Bowlby の考えに基づいている。

Bartholomew の理論に基づき、Brennan & Shaver (1998) は ECR 尺度(the Experiences in Close Relationships inventory)を作成した。中尾・加藤(2004)はそれをもとに、一般他者に対する愛着スタイルを測定するものとして、一般他者 ECR 尺度(the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version、以下 ECR-GO)日本語版を作成している。これは、自己のIWMを自分は他者に受け入れられるかどうかについてのモデル(見捨てられ不安)、他者のIWMを他者が自分を受け入れてくれるかどうかについてのモデル(親密性回避)のこの2つの要素が高いか低いかで分類され、Bartholomew (1990)と同様に4つに愛着スタイルを分類するもの(すなわち、安定型・拒絶型・とらわれ型・恐れ型)である。

安定型は、親密性の回避、見捨てられ不安の2因子とも低いタイプである。人と親密であること、自律的であることどちらも快適とするのが特徴で、最も安定したタイプである。

拒絶型は、親密性の回避が高く、見捨てられ不安が低いタイプである。人と親密になることに不快感を覚え、自律的であることを重んじるタイプである。

とらわれ型は、親密性の回避が低く、見捨てられ不安が高いタイプである。従来アンビバレント型と言われていたものに相当し、他者と親密になることを好むが、他者に拒否されることへの不安が強いタイプである。

恐れ型は、親密性の回避、見捨てられ不安の2因子とも高く、社会的に不安定なタイプである。他者と親密さを求めているが、拒否されることが怖いので結果的に他者と親しくなることを避けるタイプである。従来回避型とされていたものを、拒絶型と恐れ型の2種類に分類したのがこの4カテゴリーの特徴である。

近年この ECR-GO が、信頼性、妥当性が確認され、多くの研究で使われている。

3. 本研究の先行研究

前述したが、Bowlby (1969) は愛着の原義を「危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特定の対象との近接を求め、またこれを維持しようとする個体(人間やその他の動物)の傾

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

向」とした。遠藤（2005）は、危機、潜在的危機から想定される心的状態は、当然のことながら、恐れや不安といったネガティブな情動と指摘している。遠藤（2005）が指摘するように愛着は、ネガティブな情動を他の個体と近接することで低減しようとする個体の傾向と言える。以上のことより愛着スタイルの特徴は、危機的な状況、対人間の葛藤や欲求不満を感じた時に顕著に現れると考えられる。

愛着スタイルと対人間の葛藤における情動との関連を見た研究に、浜井ら(2011)の研究がある。仮想葛藤場面を一つ想定し、そこで生じた情動と愛着スタイルとの関連を見た研究であった。この研究は葛藤場面を一つ設定しているが、生じる情動がある程度固定されてしまった可能性がある。信頼性を高めるためには、複数の場면을想定し、多面的に検討することが必要と考えられる。そこで本研究では浜井ら（2011）の研究をもとに、複数の場면을想定し、愛着スタイルと情動の生起との関連について検討したい。

また、今回は場面の信頼性を高めるために、対人間における欲求不満反応を見る心理検査として使用されている、P-F スタディを使用する。P-F スタディは、アメリカの心理学者 Rosenzweig（1976）によって考案された投影法の心理検査で、日常の生活場面で誰もが経験する欲求不満場면을漫画式の絵にして示してあり、被験者の言語的反応を通して、人格特性をアセスメントするものである。人為的、非人為的な障害により自我が阻害されて欲求不満を引き起こすような場面（自我阻害場面）と、他人から非難を受け、超自我が阻害され欲求不満を招くような場面（超自我阻害場面）の2つの場面で構成されている。欲求不満反応はアグレッションの方向（他責・自責・無責）とアグレッションの型（障害優位・自我防衛・欲求固執）という2つの次元から分類される。

愛着スタイルと P-F スタディとの関連を見た研究に、工藤（2006）の研究がある。この研究では恐れ型の一貫性のない攻撃性に着目し、攻撃性の抑圧、特にその防衛的な側面の抑圧という観点から、攻撃性のあり方を検討することを目的としたものである。その結果、他の愛着スタイルと比べて恐れ型には潜在的な水準での攻撃性の抑圧が存在し、特に攻撃性の自己防衛的な側面が抑圧されていることが示された。この結果から、これまで一貫性のなかった知見は、攻撃性の抑圧という同じ現象の異なる側面として捉えられることが示唆された（工藤、2006）。

本研究では、工藤（2006）の研究をもとに、恐れ型の攻撃性の抑圧という観点に着目し、愛着スタイルと P-F スタディにおけるアグレッションの方向との関連について検討していく。さらに、安定型と恐れ型に着目し、情動の生起とアグレッションの方向との関連を見ていくことで、安定型と愛着スタイルの中で最も社会的に不安定な型とされる恐れ型の特徴を捉えることを試みる。特徴を捉えることで、社会的に不安定な恐れ型の人が良好な対人関係を築いていくための一資料となればと考える。

Ⅱ. 本研究の目的・方法・結果

1. 目的

本研究の目的は青年期の愛着と、P-F スタディの欲求不満場面における情動の生起との関連、アグレッションの方向との関連を明らかにし、さらに情動の生起とアグレッションの方向との関連、そして愛着スタイルの安定型と恐れ型の特徴を捉え考察することである。

2. 方法

(1) 調査対象者

都内の大学生201名（男性90名、女性111名）に協力して頂いた。2012年12月に、授業時間を利用しての集団調査を実施した。所要時間は15分から20分程度だった。

(2) 調査内容

本研究は質問紙調査法による。質問紙はフェイスシート、愛着スタイルの質問紙、P-F スタディの4つの欲求不満場面の質問紙（情動の経験状態の測定尺度・アグレッションの方向）の3つからなる。

・【フェイスシート】

学部・学科・学年・年齢・性別を記入してもらう。

・【愛着スタイルの質問紙】

中尾・加藤（2004）の作成した ECR の一般他者版（the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version、以下 ECR-GO）を用いた。

一般他者に対する愛着スタイルを構成する2因子（見捨てられ不安・親密性回避）を測定するための多項目式尺度（30項目）。安定型・拒絶型・とらわれ型・恐れ型という4タイプを抽出できる。あてはまる程度を5件法（まったくあてはまらない＝1、あまりあてはまらない＝2、どちらでもない＝3、少しあてはまる＝4、よくあてはまる＝5）で評定させた。

項目例 見捨てられ不安：「私は、見捨てられるのではないかと心配だ。」

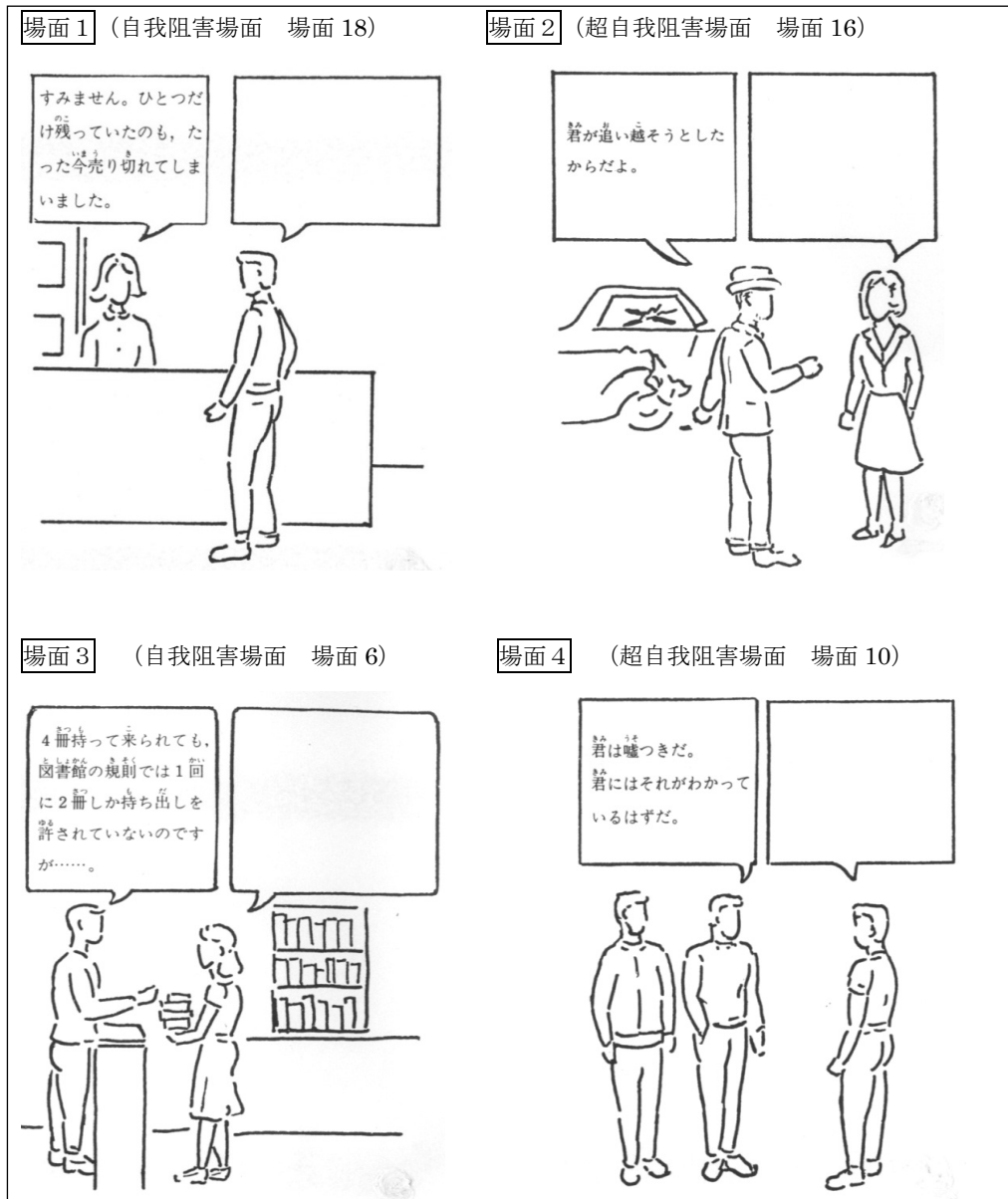
親密性回避：「私は人に心を開くのに抵抗を感じる。」 など。

・【P-F スタディの4つの欲求不満場面の質問紙】

青年用 P-F スタディの超自我阻害場面と自我阻害場面から、各々2つ（計4つ）の場面を選び、質問紙を作成した。自我阻害場面からは、場面18・場面6、超自我阻害場面からは場面16、場面10を採用した。図1は、本研究で使った P-F スタディの4場面である。

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

図1 本研究で使用した P-F スタディの4場面



情動の経験状態の測定尺度として、浜井ら（2011）の研究にならい、斉藤（1985）が作成した感情項目を大迫・高橋（1994）が作成した30項目から、浜井ら（2011）が抽出した13項目（苦悩、嫌悪、劣等感の3因子あり、苦悩は7項目、嫌悪は3項目、劣等感は3項目となる）から、今回は9項目を採用した。苦悩については因子負荷量の高い上位の3項目を採用した。以下のような手順で回答してもらった。

- ① 各々場面には、苦悩（苦しさ・悲しさ・さびしさ）、嫌悪（イライラ・怒り・嫌悪）、劣等感（劣

等感・恥ずかしさ・屈辱感)という9つの感情が記されており、各々について自分にあてはまる程度を5件法(まったくあてはまらない=1、あまりあてはまらない=2、どちらでもない=3、少しあてはまる=4、よくあてはまる=5)で回答してもらう。

② その後、質問紙の吹き出し(四角い枠の中の空白部分)に言葉を記入してもらう。

吹き出し部分の回答は、アグレッションの方向として自責・他責・無責の3つの反応に分類した。

(3) 仮説

情動の経験状態の測定尺度について、P-Fスタディについて以下の6つの仮説を設けた。

仮説(1) 自我阻害場面と比較して、超自我阻害場面では情動の表出が多く、特に嫌悪の情動を生起しやすいであろう。

仮説(2) 超自我阻害場面では、見捨てられ不安の高い「恐れ型」「とらわれ型」に苦悩の情動の生起が多いであろう。

仮説(3) 見捨てられ不安、親密性回避の2因子とも低い「安定型」はすべての場面において負の情動の生起が少ないであろう。

仮説(4) 超自我阻害場面と比較して、自我阻害場面では無責の反応が多く生じるであろう。

仮説(5) 自我阻害場面と比較して、超自我阻害場面では「恐れ型」に自責の反応、あるいは他責の反応が抑制されて無責の反応が多くみられるであろう。

仮説(6) 「安定型」では自己表明という意味で、他群に比べて自責の反応より他責の反応が多くみられるであろう。

3. 結果

調査対象者201名のうち、【愛着スタイルの質問紙】に不備のあった4名の回答を除外した、197名分の回答を分析対象とした。

(1) 愛着スタイル4群の設定

・データの数量化

親密性の回避、見捨てられ不安の2尺度の評定結果は、各項目について、「まったくあてはまらない」を1点、「あまりあてはまらない」を2点、「どちらでもない」を3点、「少しあてはまる」を4点、「よくあてはまる」を5点として得点化し、項目の合計得点を各尺度の得点とした。全30項目のうち、8項目は逆転項目であるので、「まったくあてはまらない」を5点、「あまりあてはまらない」を4点、「どちらでもない」を3点、「少しあてはまる」を2点、「よくあてはまる」を1点として得点化した。2つの下位尺度の記述統計は表1の通りである。

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

表1 親密性回避得点・見捨てられ不安得点の記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
親密性の回避	1 5	5 4	35.23	8.76
見捨てられ不安	2 2	7 9	48.01	11.86

・愛着スタイルの分類

表1に示した、親密性の回避得点の平均値(35.23)と標準偏差(8.76)をもとに、平均値から1/4標準偏差を引いた得点以下の調査対象者を親密性の回避低群(N=73)、平均値に1/4標準偏差を足した得点以上の調査対象者を親密性の回避高群(N=63)として、群分けを行った。また、見捨てられ不安得点の平均値(48.01)と標準偏差(11.86)をもとに、平均値から1/4標準偏差を引いた得点以下の調査対象者を見捨てられ不安低群(N=70)、平均値に1/4標準偏差を足した得点以上の調査対象者を見捨てられ不安高群(N=66)として、群分けを行った。

図2 1/4標準偏差と1/2標準偏差で群分けを行った結果

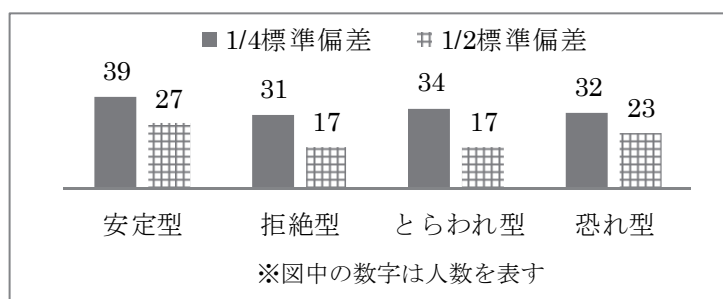


図2は、1/4標準偏差で群分けした結果と1/2標準偏差で群分けした結果を比べたものである。1/2標準偏差で群分けした結果を見てみると、1/4標準偏差の結果と比べて被験者の人数が大幅に減少し、4つの愛着スタイルに大きくバラつきがみられることがわかる。そのため今回は浜井らの研究にない、1/4標準偏差での群分けを行った。

その結果、愛着スタイルは、分析対象者197名のうち136名(安定型39人、とらわれ型34人、拒絶型30人、恐れ型32人)に分類された。表2に群分けの基準となった得点を表し、表3に愛着スタイルの分類の結果と愛着スタイルごとの平均値、標準偏差を表す。

表2 愛着スタイルの群分け基準

	安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型
親密性の回避	33点以下	38点以上	33点以下	38点以上
見捨てられ不安	45点以下	45点以下	51点以上	51点以上

表3 愛着スタイルの分類の結果と愛着スタイルごとの平均値、標準偏差 (): 標準偏差

	安定型 (39人)	拒絶型 (31人)	とらわれ型 (34人)	恐れ型 (32人)
親密性の回避	26.67 (3.91)	44.32 (4.66)	28.44 (3.62)	43.56 (4.27)
見捨てられ不安	35.56 (6.30)	38.00 (6.59)	57.35 (5.82)	60.97 (7.82)

各愛着スタイルの群分けの信頼性を確認する必要がある。親密性の回避【低群（安定型、とらわれ型）・高群（拒絶型、恐れ型）】と、見捨てられ不安、【低群（安定型、拒絶型）・高群（とらわれ型、恐れ型）】の2つの因子における、それぞれの低群、高群の2群間の平均値の相違を調べるため、t検定を行った。その結果が表4に表してある。

表4 2群間のt検定の結果

			t 値	自由度	有意差
親密性の回避	低群	安定型×とらわれ型	1.970	71	n.s.
	高群	拒絶型×恐れ型	0.667	61	n.s.
見捨てられ不安	低群	安定型×拒絶型	1.553	68	n.s.
	高群	とらわれ型×恐れ型	2.121	64	p<.05

*: p<.05 で有意差が認められるものである。

表4から、各型の特徴を示すと以下になる。

【安定型】親密性の回避、見捨てられ不安の両方が低い型である。

【拒絶型】親密性の回避が高く、見捨てられ不安が低い型である。見捨てられ不安は安定型と有意差がなく、とらわれ型、恐れ型よりかなり低い。また、親密性の回避は恐れ型と有意差がなく、安定型、とらわれ型よりかなり高い。以上が、拒絶型の特徴である。

【とらわれ型】親密性の回避が低く、見捨てられ不安が高い型である。親密性の回避は安定型と有意差がなく、拒絶型、恐れ型よりかなり低い。また、見捨てられ不安は恐れ型と有意差はあるものの安定型、拒絶型よりかなり高い。以上が、とらわれ型の特徴である。

【恐れ型】親密性の回避、見捨てられ不安の両方が高い型である。

(2) P-F スタディの4つの欲求不満場面の質問紙 (情動の経験状態の測定尺度)

質問紙1で4分類された136名のうち、情動の経験状態の測定尺度に記入漏れがあった5名を除く、131名分（安定型38人、とらわれ型33人、拒絶型31人、恐れ型30人）を情動の経験状態の測定尺度の分析対象者とした。

・データの数量化

情動の経験状態の評定結果は、各項目において、「まったくあてはまらない」を1点、「あまりあてはまらない」を2点、「どちらでもない」を3点、「少しあてはまる」を4点、「よくあてはまる」を5点として得点化した。3因子（苦悩、嫌悪、劣等感）各々3項目あり、計9項目、45点満点として得点化した。

・愛着スタイル尺度と欲求不満場面における情動の経験状態の測定尺度

4つの愛着スタイル間で、P-F スタディの欲求不満場面における情動の経験状態の評定結果の平均値に差があるかどうか検討するため、分散分析、Tukey の HSD 検定による多重比較を行った。4つの場面ごとの情動得点の平均値、分散分析による有意差を表したのが表5、場面ごとの多重比較の結果を表したのが、表6-1、表6-2、表6-3、表6-4である。4つの場面ごとの平均値をグラフに表したものが図3である。

表5 4つの場面ごとの情動得点の平均値、分散分析による有意差

	因子	安定型 (38人)	拒絶型 (31人)	とらわれ型 (33人)	恐れ型 (30人)	分散分析による 有意差
場面1 自我阻害場面	苦悩	2.73	2.71	2.99	2.86	.575
	嫌悪	1.82	2.23	2.31	2.71	.006**
	劣等感	1.62	1.78	2.18	2.26	.009**
場面2 超自我阻害場面	苦悩	2.23	2.42	2.74	3.04	.004**
	嫌悪	3.99	3.66	3.69	3.64	.444
	劣等感	2.55	2.60	3.08	2.82	.123
場面3 自我阻害場面	苦悩	1.96	2.00	2.53	2.30	.058†
	嫌悪	1.54	2.04	2.31	2.68	.000***
	劣等感	2.34	2.61	2.89	3.08	.007**
場面4 超自我阻害場面	苦悩	3.07	3.19	3.48	3.58	.226
	嫌悪	3.06	3.24	3.96	3.60	.011*
	劣等感	2.68	2.79	3.60	3.36	.001***

*** : $p<.001$ 、** : $p<.01$ 、* : $p<.05$ 、† : $p<.10$ で有意差、有意傾向が認められるものである。

表6-1 場面1の多重比較の結果

		平均値の差	標準誤差	有意確率
劣等感	安定 とらわれ	-.559*	.211	.044*
	安定 恐れ	-.633*	.217	.021*
嫌悪	安定 恐れ	-.887	.247	.003**

表6-2 場面2の多重比較の結果

		平均値の差	標準誤差	有意確率
苦悩	安定 恐れ	-.816*	.232	.003**

表6-3 場面3の多重比較の結果

		平均値の差	標準誤差	有意確率
劣等感	安定 恐れ	-.736*	.224	.007
	安定 とらわれ	-.778*	.224	.004
嫌悪	安定 恐れ	-1.143*	.230	.000
嫌悪	拒絶 恐れ	-.633*	.243	.049

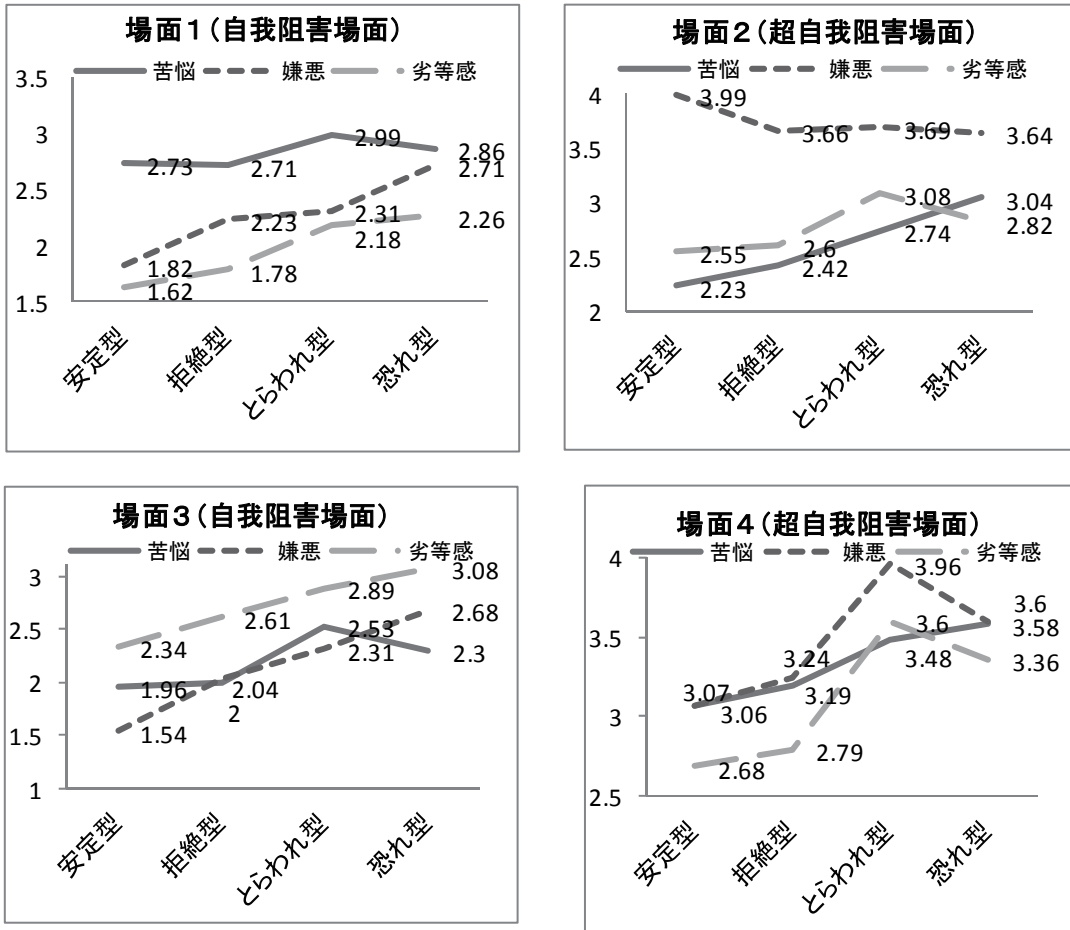
表6-4 場面4の多重比較の結果

		平均値の差	標準誤差	有意確率
劣等感	安定 とらわれ	-.921*	.252	.002
劣等感	安定 恐れ	-.680*	.259	.047
劣等感	拒絶 とらわれ	.807*	.268	.016
嫌悪	安定 とらわれ	-.898*	.282	.010

*** : $p<.001$ 、** : $p<.01$ 、* : $p<.05$ で有意差が認められるものである。

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグRESSIONの方向との関連性について

図3 4つの場面ごとの情動得点の平均値



以上から言える、場面のそれぞれの特徴は以下の通りである。

・場面1

嫌悪、劣等感において、恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の順に得点が高く、苦悩において、とらわれ型、恐れ型、安定型、拒絶型の順に得点が高かった。

嫌悪において、1%水準で有意な差が見られた ($P=.006$)。また、多重比較では、安定型と恐れ型の間に1%水準で有意な差が見られた ($P=.003$)。

劣等感において、1%水準で有意な差が見られた ($P=.009$)。また、多重比較では、安定型ととらわれ型の間に5%水準で有意な差が見られた ($P=.044$)。安定型と恐れ型の間に5%水準で有意な差が見られた ($P=.021$)。

・場面2

苦悩において、恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の順に得点が高く、嫌悪において、安定型、

とらわれ型、拒絶型、恐れ型の順に得点が高く、劣等感において、とらわれ型、恐れ型、拒絶型、安定型の順に得点が高かった。

苦悩において、1%水準で有意な差が見られた ($P=.004$)。また、多重比較では、安定型と恐れ型の間に1%水準で有意な差が見られた ($P=.003$)

・場面3

苦悩において、とらわれ型、恐れ型、拒絶型、安定型の順に得点が高く、嫌悪、劣等感において、恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の順に得点が高かった。

苦悩において、10%水準の有意傾向が見られた ($P=.058$)。

嫌悪において0.1%水準で有意な差が見られた ($P=.000$)。また、多重比較では、安定型ととらわれ型の間に1%水準で有意な差が見られた ($P=.004$)。安定型と恐れ型の間に0.1%水準で有意な差が見られた ($P=.000$)。拒絶型と恐れ型との間に5%水準で有意な差が見られた ($P=.049$)。

劣等感で1%水準の有意な差が見られた ($P=.007$)。また、多重比較では、安定型と恐れ型の間に1%水準で有意な差が見られた ($P=.007$)。

・場面4

苦悩において、恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の順に得点が高く、嫌悪、劣等感において、とらわれ型、恐れ型、拒絶型、安定型の順に得点が高かった。

嫌悪において5%水準で有意な差が見られた ($P=.011$)。また、多重比較では、安定型ととらわれ型の間に5%水準で有意な差が見られた ($P=.010$)。

劣等感において0.1%水準で有意な差が見られた ($P=.001$)。また、多重比較では、安定型ととらわれ型の間に1%水準で有意な差が見られた ($P=.002$)。安定型と恐れ型の間に5%水準で有意な差が見られた ($P=.047$)。拒絶型ととらわれ型の間に有意な差が見られた ($P=.016$)。

以上より、どの場面のどの因子においても、恐れ型・とらわれ型は全体的に得点が高く、安定型・拒絶型は、恐れ型、とらわれ型に比べ、全体的に得点が低いことがわかる。しかし、場面2・超自我阻害場面の嫌悪において安定型は、最も得点が高く、恐れ型は、最も得点が低かった。図3を見ると、場面1ではどの愛着スタイルも苦悩の得点が高く、場面3では、劣等感の得点が高いことがわかる。超自我阻害場面の場面2、場面4は、場面4の安定型以外、嫌悪の得点が高くなっていることがわかる。

さらに自我阻害場面、超自我阻害場面での平均値の差を比べるために、分散分析、TukeyのHSD検定による多重比較を行った。表7は自我阻害場面、超自我阻害場面における情動得点の平均値、分散分析による有意差を表している。表8-1-1は自我阻害場面の分散分析の結果、表8-2-1は超自我阻害場面の分散分析の結果で、表8-1-2は自我阻害場面の多重比較の結果、表8-2-2は超自我阻害場面の多重比較の結果である。図4は、自我阻害場面、超自我阻害場面における情動得点の平均値をグラフに表したものである。

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

表 7 自我阻害場面、超自我阻害場面における情動得点の平均値、分散分析による有意差

	因子	安定型 (38 人)	拒絶型 (31 人)	とらわれ型 (33 人)	恐れ型 (30 人)	分散分析による 有意差
自我阻害場面 (場面 1・3)	苦悩	4.69	4.71	5.52	5.16	.114
	嫌悪	3.36	4.28	4.63	5.39	.000***
	劣等感	3.96	4.39	5.07	5.33	.001***
超自我阻害場面 (場面 2・4)	苦悩	5.30	5.61	6.22	6.62	.010*
	嫌悪	7.05	6.90	7.65	7.24	.381
	劣等感	5.23	5.39	6.68	6.18	.002**

*** : $p<.001$ 、** : $p<.01$ 、* : $p<.05$ で有意差が認められるものである。

表 8-1-1 自我阻害場面の分散分析の結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
13 苦悩	グループ間	15.556	3	5.185	2.026	.114
	グループ内	325.098	127	2.560		
	合計	340.653	130			
13 嫌悪	グループ間	72.322	3	24.107	9.068	.000
	グループ内	337.624	127	2.658		
	合計	409.946	130			
13 劣等感	グループ間	39.728	3	13.243	5.462	.001
	グループ内	307.918	127	2.425		
	合計	347.645	130			

表 8-1-2 自我阻害場面の多重比較の結果

		平均値の差	標準誤差	有意確率
嫌悪	安定 とらわれ	-1.267*	.388	.008**
嫌悪	安定 恐れ	-2.029*	.398	.000***
嫌悪	拒絶 恐れ	-1.111*	.421	.046*
劣等感	安定 とらわれ	-1.106*	.371	.018*
劣等感	安定 恐れ	-1.368*	.308	.003**

表 8-2-1 超自我阻害場面の分散分析の結果

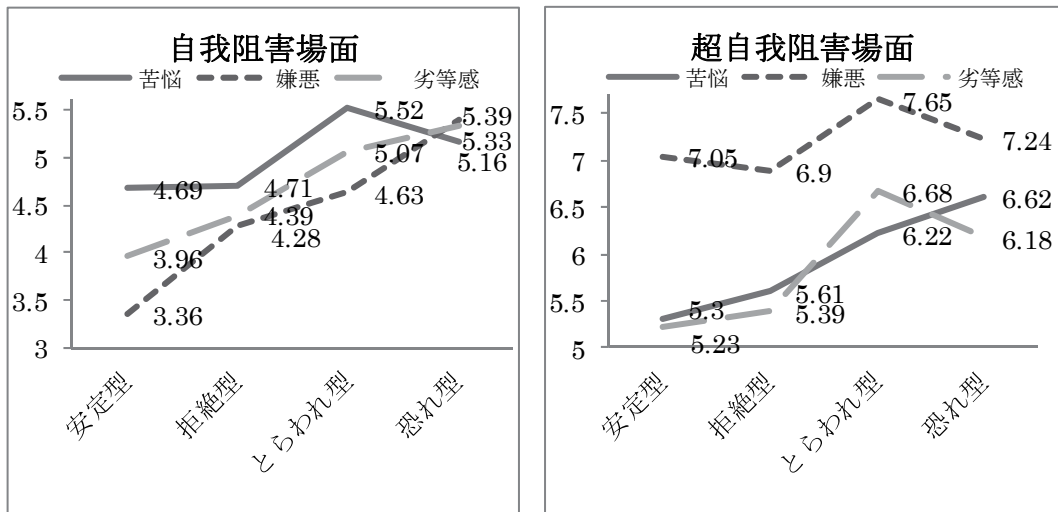
		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
24 苦悩	グループ間	35.334	3	11.778	3.933	.010
	グループ内	380.283	127	2.994		
	合計	415.617	130			
24 嫌悪	グループ間	10.146	3	3.382	1.032	.381
	グループ内	416.344	127	3.278		
	合計	426.490	130			
24 劣等感	グループ間	46.856	3	15.619	5.108	.002
	グループ内	388.313	127	3.058		
	合計	435.169	130			

表 8-2-2 超自我阻害場面の多重比較の結果

		平均値の差	標準偏差	有意確率
苦悩	安定 恐れ	-1.324*	.423	.011*
劣等感	安定 とらわれ	-1.449*	.416	.004**
劣等感	拒絶 とらわれ	-1.288*	.441	.021*

*** : $p<.001$ 、** : $p<.01$ 、* : $p<.05$ で有意差が認められるものである。

図4 自我阻害場面、超自我阻害場面における情動得点の平均値



以上から言える、自我阻害場面、超自我阻害場面の特徴は以下の通りである。

・自我阻害場面（場面1・場面3）

嫌悪・劣等感において、恐れ型・とらわれ型・拒絶型・安定型の順に得点が高く、苦悩においては、とらわれ型・恐れ型・拒絶型・安定型の順に得点が高かった。

嫌悪において、0.1%水準で有意な差が見られた ($P=0.000$)。多重比較では、安定型ととらわれ型の間に1%水準で有意差 ($P=0.008$)、安定型と恐れ型の間に0.1%水準で有意差 ($P=0.000$)、拒絶型と恐れ型に5%水準で有意差 ($P=0.046$)が見られた。

劣等感においても、0.1%水準で有意な差が見られた ($P=0.001$)。多重比較では、安定型ととらわれ型に5%水準で有意差 ($P=0.018$)、安定型と恐れ型に1%水準で有意差 ($P=0.003$)が見られた。

図4を見ると、安定型、拒絶型、とらわれ型は、劣等感、嫌悪、苦悩の順に得点が高かったが、恐れ型においては、嫌悪、苦悩、劣等感の順に得点が高かったことがわかる。

・超自我阻害場面（場面2・場面4）

苦悩において、恐れ型・とらわれ型・拒絶型・安定型の順に得点が高く、嫌悪において、とらわれ型・恐れ型・拒絶型・安定型の順に得点が高く、劣等感において、とらわれ型・恐れ型・拒絶型・安定型の順に得点が高かった。

苦悩において、1%水準で有意な差が見られた ($P=0.010$)。多重比較では、安定型と恐れ型の間に5%水準で有意差 ($P=0.011$)が見られた。

劣等感において1%水準で有意な差が見られた ($P=0.002$)。多重比較では、安定型ととらわれ型の間に1%水準で有意差 ($P=0.004$)、拒絶型ととらわれ型の間に5%水準で有意差 ($P=0.021$)が見られた。

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

図4を見ると、どの愛着スタイルも、嫌悪の得点が最も高いことがわかる。安定型、拒絶型、恐れ型は、嫌悪、苦悩、劣等感の順に得点が高かったが、とらわれ型は、嫌悪、劣等感、苦悩の順に得点が高かった。

以上より、全体的な特徴として、恐れ型・とらわれ型において得点が高く、拒絶型・安定型において、恐れ型・とらわれ型と比べ、得点が低かった。また、自我阻害場面と比べ、超自我阻害場面は全体的に得点が高かった。これらの結果をまとめると、見捨てられ不安の高い、とらわれ型・恐れ型において情動の得点が高く出たことから、見捨てられ不安が高いと欲求不満に陥った場合、負の情動を生起しやすいと言える。自我阻害場面と比べ、超自我阻害場面では愛着スタイルに関わらず全体的に情動の得点が高く出たことから、人から直接的に非難されるような場面では負の情動を生起しやすいと言える。自我阻害場面、超自我阻害場面と比較すると、自我阻害場面において「苦悩」のどの型にも有意な差がなかったことから、自我阻害場面は苦悩の感情を生起しやすい場面であると言える。超自我阻害場面において「嫌悪」のどの型にも有意な差がなかったことから、超自我阻害場面は嫌悪の感情を生起しやすい場面であると言える。

(3) P-F スタディの4つの欲求不満場面の質問紙 (アグレッションの方向)

愛着スタイル質問紙で4分類された136名のうち、情動経験状態の測定尺度の得点に記入漏れがあったもの、さらにP-Fスタディの吹き出し部分に記入漏れがあった14名分を除く、122名分(安定型34人、とらわれ型32人、拒絶型28人、恐れ型28人)をアグレッションの方向の分析対象者とした。

・4場面における他責反応、自責反応、無責反応の出現率

場面ごとの吹き出し部分の回答を、他責反応、自責反応、無責反応に分類した。その出現率を表9に表した。

表9 4場面における他責反応、自責反応、無責反応の出現率(%)

反応	愛着スタイル	場面1	場面2	場面3	場面4
他責	安定型	23.5	58.8	11.7	30.8
	拒絶型	3.57	50	0	42.8
	とらわれ型	18.7	34.3	9.3	43.7
	恐れ型	10.7	28.5	3.5	48.2
	平均値	14.8	43.4	7.0	41.0
自責	安定型	0	41.1	33.8	57.3
	拒絶型	7.1	50	57.1	50
	とらわれ型	3.1	65.6	53.1	53.1
	恐れ型	0	66	51.7	48.2
	平均値	2.5	55.3	48.0	52.5
無責	安定型	76.4	0	54.4	11.7
	拒絶型	89.2	0	42.8	7.1
	とらわれ型	78	0	37.5	3.1
	恐れ型	89.2	5.35	44.6	3.5
	平均値	82.8	1.2	45.1	6.6

※ 安定型(34人)、拒絶型(28人)、とらわれ型(32人)、恐れ型(28人)
合計(122人)

図5 4場面における他責反応、自責反応、無責反応の出現率の平均値

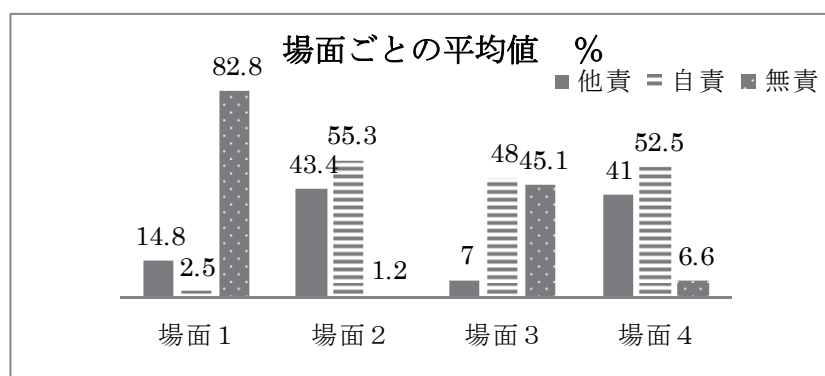


図5は、4場面における他責反応、自責反応、無責反応の出現率(各群の割合の平均)を図示したものであるが、これにより各場面の反応傾向を知ることができる。

最も出現率の高かった反応が、他の反応に比べて有意な差があるかどうか見るために、 χ^2 検定を

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

行った。その結果が、表 10-1、表 10-2、表 10-3 である。

場面 1 は無責反応が 8 割以上を占めており、反応傾向が明確な場面といえる。

場面 2 は他責反応と自責反応が同等に占めているので、欲求不満の原因を自分に向けるか他人に向けるか、2 つに分かれる場面といえる。 χ^2 検定の結果、他責反応と自責反応の割合に有意差は認められない (表 10-1)。

場面 3 は自責反応と無責反応が同等に占めているので、欲求不満の原因を自分に向けるか大したことではないとするか、2 つに分かれる場面といえる。 χ^2 検定の結果、自責反応と無責反応の割合に有意差は認められない (表 10-2)。

場面 4 は場面 2 と同様に、他責反応と自責反応が同等に占めているので、欲求不満の原因を他人に向けるか自分に向けるか、2 つに分かれる場面といえる。 χ^2 検定の結果、他責反応と自責反応の割合に有意差は認められない (表 10-3)。

以上のことから、超自我阻害場面の場面 2 と場面 4 は類似した反応傾向の出現率を示しており、欲求不満の原因を他人に向けるか自分に向けるかのどちらかであることがわかる。それに対して、自我阻害場面の場面 1 と場面 3 は欲求不満の原因を誰のせいでもないとする傾向は共通に認められるが、その出現率が異なっており、自責の念が強くなる場面もあって、同じ自我阻害場面でも違いがあることを示している。

表 10-1 場面 2 における χ^2 検定

	他責	自責	
実測値	53	67.5	120.5
割合	44%	56%	100%
期待値	60.25	60.25	120.5

p=0.18653 n.s.

表 10-2 場面 3 における χ^2 検定

	他責	無責	
実測値	58.5	55	113.5
割合	51.50%	48.50%	100%
期待値	56.75	56.75	113.5

p=0.742514 n.s.

表 10-3 場面 4 における χ^2 検定

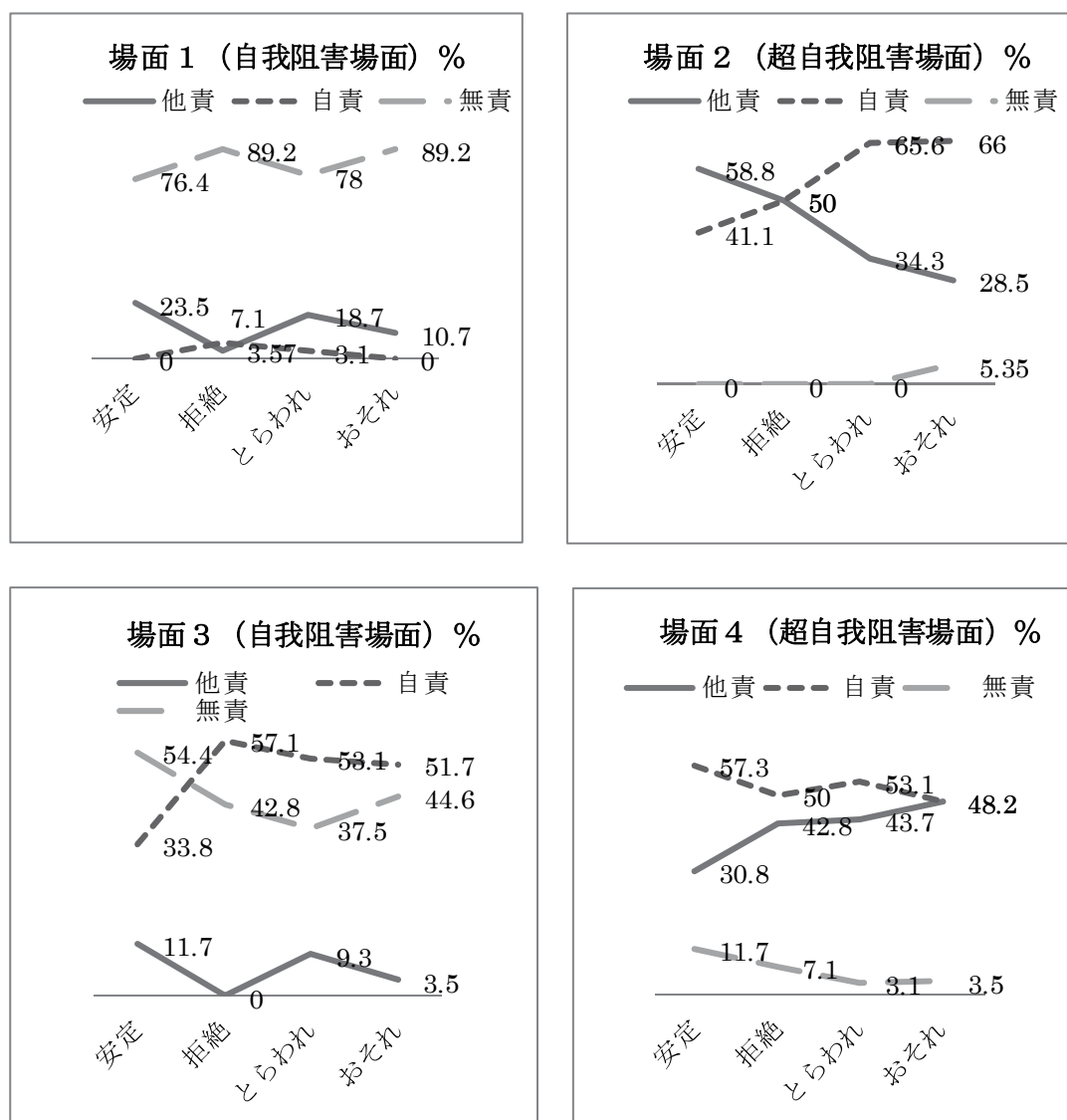
	他責	自責	
実測値	50	64	114
割合	44%	56%	100%
期待値	57	57	114

p=0.189783 n.s.

・愛着スタイルとP-Fスタディのアグレッションの方向

図6は、4つの場面における愛着スタイルごとの反応の出現率をグラフにしたものである。愛着スタイルごとの反応を見て、出現率の値に最も開きのあったもの同士に X^2 検定を行った。その結果が表11である。

図6 4つの場面における愛着スタイルごとの反応の出現率(%)



愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

表 1 1 X²検定

	X ² 値	自由度	有意確率
場面 1 無責 安定型—恐れ型	.961	1	.327
場面 1 他責 安定型—拒絶型	3.452	1	.063 †
場面 2 無責 安定型—恐れ型	5.674	1	.017*
場面 2 自責 安定型—恐れ型	3.815	1	.050*
場面 3 無責 安定型—とらわれ型	1.605	1	.205
場面 3 自責 安定型—拒絶型	3.838	1	.050*
場面 4 他責 安定型—恐れ型	1.944	1	.163
場面 4 自責 安定型—恐れ型	0.515	1	.472
場面 4 無責 安定型—とらわれ型	0.740	1	.390

* : p<.05、† : p<.10 で有意差、有意傾向が認められるものである。

・自我阻害場面

場面 1 「売り切れ」では愛着スタイルの 4 群とも無責反応が圧倒的に多かった。その中でも親密性回避の高い、恐れ型と拒絶型に無責反応が多く、他責反応が少ない。他責反応が比較的多い安定型と最も少ない拒絶型には有意傾向が認められた (X²=3.452、P<.10)。

場面 3 「持ち出し」では拒絶型、とらわれ型、恐れ型の 3 群は自責反応が多いが、安定型のみ無責反応が多いことがわかる。さらに自責反応が少ない分他責反応が多い。自責反応が最も多い拒絶型と安定型には有意傾向が認められた (X²=3.838、P<.10)。

以上のことから自我阻害場面は、拒絶型、とらわれ型、恐れ型は場面によって反応が異なるが、安定型は一貫して無責反応が多い。また、安定型では他群と比べて他責反応がやや多いようである。

・超自我阻害場面

場面 2 「交通事故」では見捨てられ不安の高い恐れ型、とらわれ型の 2 群では自責反応が多く、安定型のみ他責反応が多い。他責反応について安定型と恐れ型を見ると 5%水準で有意である (X²=5.674、P<.05)。また、同様に自責反応について見ると、有意傾向が認められる (X²=3.815、P<.10)。

場面 4 「嘘つき」では、とらわれ型、拒絶型、安定型の 3 群では他責反応よりも自責反応が多い。さらに、安定型では他群よりも他責反応が少ない分、無責反応がやや多い。他責反応について安定型と、恐れ型を見ると、有意差は認められなかった (X²=1.944、n.s.)。

以上から、超自我阻害場面では、拒絶型、とらわれ型、恐れ型の 3 群は自責反応が他責反応と等しいか多いかであり、一貫した反応を示していると言える。しかし、安定型は自我阻害場面とはまったく逆で場面によって反応が異なり、他責反応が多くなる場面や自責反応が多くなる場面がある。

(4) P-F スタディの3つのタイプと情動の生起との関連性

・データの数量化

P-F スタディの他責的反応、自責的反応、無責的反応のいずれか4場面のうち2場面以上でみられたものを、各人の最も優位なアグレッションの方向とし、他責型、自責型、無責型に群分けを行った。群分けできなかったものについては、その他に分類した。

愛着スタイル別の他責型、自責型、無責型の占める人数と割合を表したのが表12である。安定型は、他責型が多く(32.4%)、拒絶型は自責型が多く(50%)、とらわれ型も自責型が多い(45.2%)。恐れ型は自責型が多いが(28.6%)、その他に分類されたものも同じ割合だった。

表12 愛着スタイル別の他責型、自責型、無責型の人数と割合 () : %

	他責型	自責型	無責型	その他	計
安定型	11人(32.4)	6人(17.6)	8人(23.5)	9人(26.5)	34人
拒絶型	3人(10.7)	14人(50.0)	3人(10.7)	8人(28.6)	28人
とらわれ型	7人(22.6)	14人(45.2)	5人(16.1)	5人(16.1)	31人
恐れ型	6人(21.4)	8人(28.6)	6人(21.4)	8人(28.6)	28人
計	27人(22.3)	42人(34.7)	22人(18.2)	30人(24.8)	121人

・P-F スタディの3つのタイプと情動の生起との関連性

次に、両極端の群である、安定型(見捨てられ不安、親密性の回避の2因子とも低い)と、恐れ型(見捨てられ不安、親密性の回避の2因子とも高い)に着目し、P-F スタディの3つのタイプと情動生起との関連性を見ていく。安定型と恐れ型の他責型、自責型、無責型と情動得点の平均値を見るため、表13を作成した。図7-1～図7-4が4場面における安定型、恐れ型の他責型、自責型、無責型の情動得点の平均値をグラフにしたものである。

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

表 1 3 安定型と恐れ型の比較による 4 場面における P-F スタディの他責型、自責型、無責型の情動
得点の平均値（表中の数字は、9 つの情動得点についての 45 点満点中の平均値を示す。）

愛着スタイル	アグレッションの方向	場面 1	場面 2	場面 3	場面 4
安定型	他責型（11 人）	19.4	26.3	17.8	26.5
	自責型（6 人）	18.7	28.0	19.7	28.8
	無責型（8 人）	18.4	24.3	15.4	23.5
	平均（25 人）	18.9	26.0	17.5	26.1
恐れ型	他責型（6 人）	24.7	27.5	25.5	34.8
	自責型（8 人）	22.5	30.4	25.3	31.5
	無責型（6 人）	24.7	29.3	23.5	33.0
	平均（20 人）	23.8	29.2	24.8	33.0
安定型、恐れ型 の平均値の差	他責型	5.3	1.2	7.7	8.3
	自責型	3.8	2.4	5.6	2.7
	無責型	6.3	5.0	8.1	9.5
	平均	4.9	3.2	7.3	6.9

図 7 - 1 他責型の平均

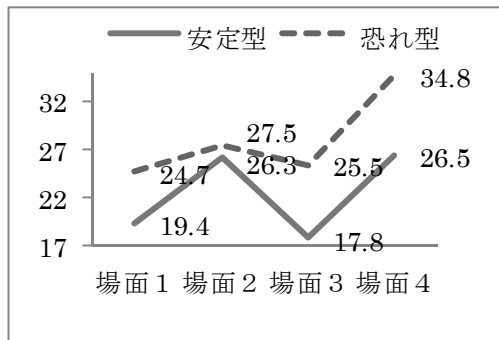


図 7 - 2 自責型の平均

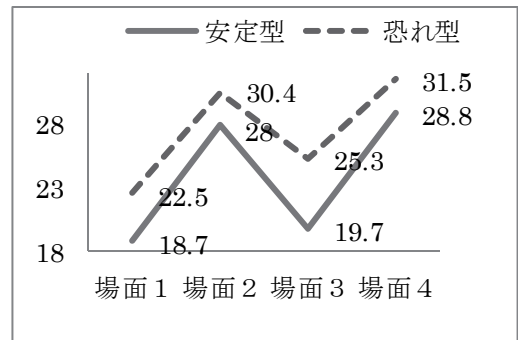


図 7 - 3 無責型の平均

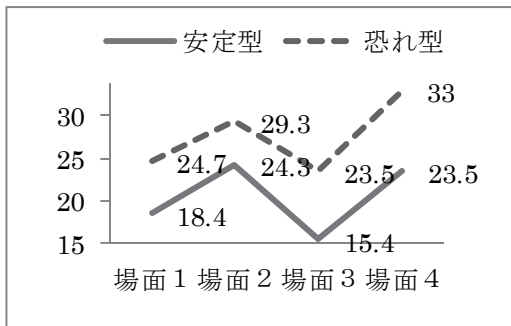
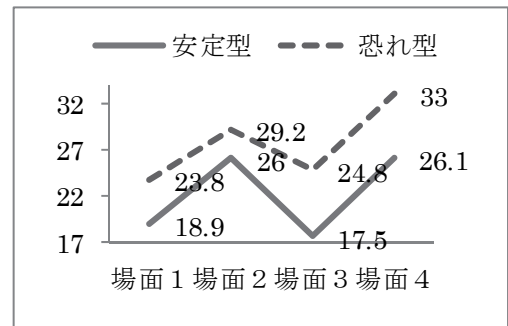


図 7 - 4 全体の平均



安定型、恐れ型の平均値の相違を見るため、T検定（等分散を仮定した2標本による検定）を行った。その結果が表14～表15-10に表してある（有意差、有意傾向が認められたもののみ）。

表14 恐れ型と安定型のT検定：等分散を仮定した2標本による検定

	場面1	場面2	場面3	場面4
他責	t=1.912 .075 †	t=0.438 .668 n.s.	t=2.415 .029*	t=2.118 .051 †
自責	t=1.079 .301 n.s.	t=0.717 .487 n.s.	t=1.139 .277 n.s.	t=0.683 .507 n.s.
無責	t=1.722 .110 n.s.	t=1.826 .092 †	t=2.570 .025*	t=1.910 .080 †
平均	t=2.737 .009**	t=1.911 .062 †	t=3.517 .001**	t=2.886 .006**

** : p<.01、* : p<.05、† : p<.10 で有意差、有意傾向が認められるものである。

表15-1 場面1 他責 T検定結果

	変数1	変数2
平均	19.36363636	24.66666667
分散	17.65454545	54.26666667
観測数	11	6
プールされた分散	29.85858586	
仮説平均との差異	0	
自由度	15	
t	-1.912216223	
P(T<=t) 片側	0.037570153	
t 境界値 片側	1.753050356	
P(T<=t) 両側	0.075140307	
t 境界値 両側	2.131449546	

表15-2 場面1 平均 T検定結果

	変数1	変数2
平均	18.88	23.8
分散	20.27666667	55.64210526
観測数	25	20
プールされた分散	35.90325581	
仮説平均との差異	0	
自由度	43	
t	-2.737013448	
P(T<=t) 片側	0.004489404	
t 境界値 片側	1.681070703	
P(T<=t) 両側	0.008978808	
t 境界値 両側	2.016692199	

表15-3 場面2 無責 T検定結果

	変数1	変数2
平均	24.25	29.33333333
分散	29.9285714	21.86666667
観測数	8	6
プールされた分散	26.5694444	
仮説平均との差異	0	
自由度	12	
t	-1.8260554	
P(T<=t) 片側	0.04640594	
t 境界値 片側	1.78228756	
P(T<=t) 両側	0.09281188	
t 境界値 両側	2.17881283	

表15-4 場面2 平均 T検定結果

	変数1	変数2
平均	26.04	29.2
分散	31.79	28.58947368
観測数	25	20
プールされた分散	30.375814	
仮説平均との差異	0	
自由度	43	
t	-1.9111812	
P(T<=t) 片側	0.03133093	
t 境界値 片側	1.6810707	
P(T<=t) 両側	0.06266186	
t 境界値 両側	2.0166922	

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

表 1 5-5 場面 3 他責 T 検定結果

	変数 1	変数 2
平均	17.81818182	25.5
分散	40.76363636	36.3
観測数	11	6
プールされた分散	39.27575758	
仮説平均との差異	0	
自由度	15	
t	-2.415178564	
P(T<=t) 片側	0.014476219	
t 境界値 片側	1.753050356	
P(T<=t) 両側	0.028952438	
t 境界値 両側	2.131449546	

表 1 5-6 場面 3 無責 T 検定結果

	変数 1	変数 2
平均	15.375	23.5
分散	15.125	61.1
観測数	8	6
プールされた分散	34.28125	
仮説平均との差異	0	
自由度	12	
t	-2.569517891	
P(T<=t) 片側	0.012283686	
t 境界値 片側	1.782287556	
P(T<=t) 両側	0.024567371	
t 境界値 両側	2.17881283	

表 1 5-7 場面 3 平均 T 検定結果

	変数 1	変数 2
平均	17.48	24.8
分散	31.09333333	69.642105
観測数	25	20
プールされた分散	48.12651163	
仮説平均との差異	0	
自由度	43	
t	-3.517204616	
P(T<=t) 片側	0.000521518	
t 境界値 片側	1.681070703	
P(T<=t) 両側	0.001043035	
t 境界値 両側	2.016692199	

表 1 5-8 場面 4 他責 T 検定結果

	変数 1	変数 2
平均	26.54545455	34.83333333
分散	62.27272727	53.76666667
観測数	11	6
プールされた分散	59.43737374	
仮説平均との差異	0	
自由度	15	
t	-2.118171362	
P(T<=t) 片側	0.025634801	
t 境界値 片側	1.753050356	
P(T<=t) 両側	0.051269603	
t 境界値 両側	2.131449546	

表 1 5-9 場面 4 無責 T 検定結果

	変数 1	変数 2
平均	23.5	33
分散	104.5714286	57.2
観測数	8	6
プールされた分散	84.83333333	
仮説平均との差異	0	
自由度	12	
t	-1.909839803	
P(T<=t) 片側	0.04017184	
t 境界値 片側	1.782287556	
P(T<=t) 両側	0.08034368	
t 境界値 両側	2.17881283	

表 1 5-10 場面 4 平均 T 検定結果

	変数 1	変数 2
平均	26.12	32.95
分散	67.27666667	55.83947368
観測数	25	20
プールされた分散	62.22302326	
仮説平均との差異	0	
自由度	43	
t	-2.886183202	
P(T<=t) 片側	0.003038092	
t 境界値 片側	1.681070703	
P(T<=t) 両側	0.006076184	
t 境界値 両側	2.016692199	

4 つの場面すべてで恐れ型は安定型に比べて情動の生起が多い（特に、場面 1、3、4）。また、安定型、恐れ型のいずれにおいても、自我阻害場面に比べて超自我阻害場面での情動の生起が多いこ

とがわかる。

安定型、恐れ型それぞれにおける他責型、自責型、無責型について有意差を見ると、他責型には場面2を除く3場面で有意差、有意傾向が、同様に無責型にも場面1を除く3場面で有意差、有意傾向が認められる。しかし、自責型にはまったく有意差、有意傾向が認められない。

以上のことから、愛着スタイルの恐れ型の中でも他責型と無責型は、安定型のそれに比べて情動を生起させやすいが、自責型は愛着スタイルの安定型であっても情動を生起させるため、恐れ型と安定型の差が小さくなっていることがわかる（特に場面2～4）。

表16は、安定型、恐れ型に分類されたすべての対象者について、4場面における情動得点の平均値を示したもの、図8はそれをグラフ化したものである。これらと表13、表14を比較すると、非常によく似た傾向を示していることがわかる。すなわち、情動得点はアグレッションの方向を加味しなくても加味しても、場面1、3、4には2群間に有意差があるが、場面2のみ有意差が認められないということである。

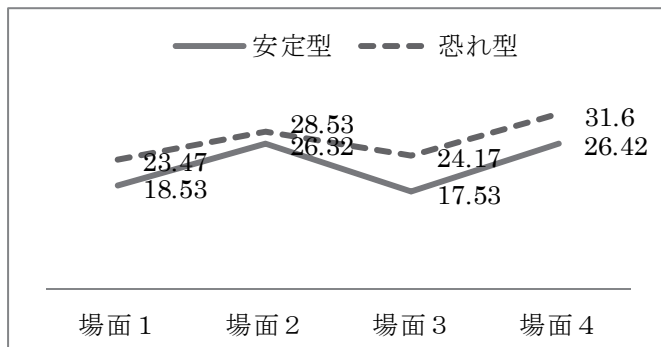
以上のことから、対象者がやや少ない表13、表14であっても、信頼できるものであるといえる。さらにアグレッションの方向を加味すると、他責型、無責型と自責型では安定型と恐れ型の2群間に異なった傾向があることが見出されたのである。

表16 安定型と恐れ型の比較による4場面における情動得点の平均値

	場面1	場面2	場面3	場面4
安定型 (38)	18.53	26.32	17.53	26.42
恐れ型 (30)	23.47	28.53	24.17	31.60
恐れ型と安定型の 有意差検定	t=3.430 **	t=1.662 n.s.	t=4.151***	t=2.917**

***: $p<.001$ **: $p<.01$ で有意差が認められるものである。

図8 安定型と恐れ型の比較による4場面における情動得点の平均値



Ⅲ. 総合的考察

1. 自我阻害場面、超自我阻害場面の比較

Ⅱ. 3. 結果で述べた、情動の経験状態の測定尺度・アグレッションの方向の結果から、自我阻害場面、超自我阻害場面を比較し、考察する。

(1) 自我阻害場面

・情動の経験状態の測定尺度

場面1（売り切れ）において、嫌悪、劣等感には有意な差が見られたが、苦悩には有意な差は見られなかった。そしてどの愛着スタイルにおいても苦悩が最も得点が高かった。これは、欲しかったものが売り切れてしまったという、苦しさ・悲しさ・さびしさの表れと考えられる。また、場面3（持ち出し）は、劣等感、嫌悪において有意な差、苦悩において有意な傾向が見られた。そして、どの愛着スタイルにおいても劣等感が最も得点が高かった。場面3は特に劣等感を抱きやすく、これは持ち出しの規則を知らなかったという恥ずかしさの表れであると考えられる。

場面1、場面3を合わせてみると、苦悩にだけ有意な差は見られず、嫌悪、劣等感に有意な差が見られた。つまり自我阻害場面のよう、人から直接的に非難されずに欲求不満を引き起こすような場面の特徴は、愛着スタイルにかかわらず苦悩を生じやすく、苦しさ、悲しさ、さびしさ、といった苦悩の情動が表出することはごく自然な場面であるということが言える。また、嫌悪、劣等感に有意な差が見られ、恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の順に得点が高かった。つまり、自我阻害場面は、安定型・拒絶型と比べ、見捨てられ不安の高い、恐れ型、とらわれ型において嫌悪や劣等感が生じやすい場面であり、嫌悪や劣等感の情動を抱きすぎることは、社会適応上の問題を生じさせる恐れがあると考えられる。

・アグレッションの方向

場面1（売り切れ）では、愛着スタイルの4群とも無責反応が圧倒的に多く、次に多い他責反応の間に有意な差が認められた。中でも親密性の回避の高い、拒絶型・恐れ型に無責反応が多かった。場面1は「たった今売り切れてしまいました。」というようにこの一コマのみで考えると、偶然に起こったことであって、左側の売り手にも右側の買い手にも非があるとは考えにくい。そのために愛着スタイルにかかわらず無責反応が多かったのではないだろうか。場面3（持ち出し）では、自責反応と無責反応の間に有意な差は見られなかった。そして、場面1と同様に無責反応が多いが、それ以上に拒絶型、とらわれ型、恐れ型に自責反応が多かった。自分が規則を知らないことに非があると受け取り、自責の念に駆られ、自責反応が増えたと考えられる。だが、安定型にのみ無責反応が多く、さらに安定型は自責反応が少ない分、他責反応が多かった。そして安定型と拒絶型の自責反応に有意差が

見られている。自我阻害場面では、安定型は一貫して、自分のせいではないと考える傾向があり、無責反応が増えたと考えられる。また、拒絶型、とらわれ型、恐れ型は、場面によって自分のせいと考える傾向があることを示している。

・まとめ

以上から、情動の経験状態の測定尺度には、場面1、場面3において、嫌悪、劣等感において有意な差があり、苦悩には有意な差がほとんどなかったというように、ほぼ一貫した結果が得られた。アグレッションの方向には、場面1、場面3において共通する点が少なく、愛着スタイルの特性よりもそれぞれの場面の特色が大きく現れたと言える。

（2）超自我阻害場面

・情動の経験状態の測定尺度

場面2（交通事故）と場面4（嘘つき）の共通する点は、どの愛着スタイルにもイライラ、怒りといった嫌悪が多いことである。特に場面2での嫌悪の情動生起の現れが顕著であった。また、2つの場面を合わせてみると、嫌悪にのみ有意な差が見られていない。超自我阻害場面の特徴として、人から直接的に非難されるような場面であるため、嫌悪の情動が生起されることはごく自然と考えられる。

場面2（交通事故）において、劣等感には有意な差が見られたが、嫌悪と苦悩には有意な差が見られなかった。場面4（嘘つき）では、劣等感には有意な差が見られず、嫌悪と苦悩に有意な差が見られた。このように、2つの場面では有意な差という点で全く異なっていた。また、場面2では、苦悩の得点が、恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の順に高く、場面4では、嫌悪、劣等感の得点が、とらわれ型、恐れ型、拒絶型、安定型の順に高くなっている。すなわち、場面2では、見捨てられ不安の高い、恐れ型・とらわれ型は、場面2では苦悩の情動を生起させることが多く、場面4では嫌悪・劣等感の情動を生起させやすいと言える。つまり、場面2のような場面で苦悩を必要以上に生起させたり、場面4のような場面で嫌悪・劣等感を必要以上に生起させることは、社会適応上の問題を生じさせる恐れがあると考えられる。

・アグレッションの方向

場面2、場面4の全体の平均値を比べると、自責、他責、無責の順に占めており、似たような推移をしている。だが、愛着スタイルごとに見ていくと、場面2の自責反応は、恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の順に高いが、場面4の自責反応は、安定型、とらわれ型、拒絶型、恐れ型の順に高くなっている。他責反応についても、場面2は、安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型の順に高く、場面4の他責反応は、恐れ型、とらわれ型、拒絶型、安定型の順に高くなっている。見捨てられ不安の高群、低群の自責反応、他責反応が場面によって逆に推移していることがわかる。拒絶型、とらわれ

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

型、恐れ型は、自責反応が他責反応と等しいか多いかであり一貫しているが、安定型は場面によって自責反応、他責反応のどちらかになると言える。人から責められた場合、安定型はアサーティブに振る舞うことができるという意味で、場面によっては他責反応が多かったと考えられる。

・まとめ

自我阻害場面ほどではないが、超自我阻害場面においても情動経験状態の測定尺度では愛着スタイルの影響がみられる。これに対して、アグレッションの方向という点では共通することが少ないが、そのことが場面認知の違いを表しているように思われる。すなわち、愛着スタイルによって同じ場면을他責的にとらえたり自責的にとらえたりと、正反対の認知を行う可能性を示唆していると考えられる。

2. 愛着スタイルの安定型と恐れ型の比較

安定型、恐れ型の情動の経験状態の測定尺度と、P-F スタディのアグレッションの方向との2つの結果の関連性を検討した。情動の経験状態の測定尺度の結果を見ると、4つの場面のすべてにおいて安定型よりも恐れ型の得点の方が高く推移し、場面1, 3, 4では有意差、場面2では有意傾向が認められた。ほとんどの場面で恐れ型は安定型に比べて有意に負の情動を生起させやすいことがわかる。そして、安定型、恐れ型のどちらも自我阻害場面に比べ、超自我阻害場面での得点が高く推移している。また、安定型、恐れ型に分類されたすべての対象者の結果で同様に有意差を見た場合、場面1, 3, 4に有意差が認められたので、対象者が少なくても信頼性のある結果とすることができる。

安定型、恐れ型における他責型、自責型、無責型の有意差については、他責型には場面2を除く3場面では有意差、有意傾向、同様に無責型にも場面1を除く3場面では有意差、有意傾向が認められたが、自責型にはまったく有意差、有意傾向が認められなかった。

つまり、恐れ型の他責型、無責型は、安定型の他責型、無責型よりも負の情動を生起させやすいが、安定型であっても自責型の人は恐れ型の自責型と変わらず負の情動を生起させやすいということが明らかとなった。自責型の人は他責型や無責型の人に比べて欲求不満場面で動揺したり、感情的になったりすることを意味していると言える。特に恐れ型の中でも自責型に該当する人が動揺したり、感情的になったりと社会的に不安定であることがわかった。

3. 先行研究（浜井ら、2011）と本研究の結果の比較

情動の経験状態の測定尺度について、先行研究と本研究の比較を行う。

先行研究では、苦悩に0.1%の有意な差が見られ、とらわれ型・恐れ型は安定型・拒絶型と比べ有意な差が見られた。本研究では、苦悩において場面2に1%水準の有意な差が見られ、場面3には有

意傾向が見られた。嫌悪には、先行研究において有意な差は見られなかったが、本研究では、場面1、3、4には有意な差が見られ、場面2のみ有意な差は見られなかった。また、劣等感には、先行研究において1%の有意差が見られ、とらわれ型と恐れ型は拒絶型よりも有意な差が見られた。本研究では、劣等感に有意な差が見られたのは、場面1、3、4であった。

これらを総合的に検討してみると、本研究の4つの場面において先行研究と一番近い結果と言えるのは、苦悩に有意な差が見られ、嫌悪に有意な差は見られなかった場面2と言える。つまり、場面2は超自我阻害場面であったので、先行研究の場面は超自我阻害場面と似た場面と言える。愛着スタイルの特徴が現れるのは、場面によって異なるということであるが、後述する今後の課題で再考する。

4. 仮説の検証

結果に基づきながら、6つの仮説が支持されたかどうかを検証する。

- ・仮説(1) 自我阻害場面と比較して、超自我阻害場面では情動の表出が多く、特に嫌悪の情動を生起しやすいであろう。

情動の経験状態の測定尺度の結果を見てみると、超自我阻害場面では、自我阻害場面に比べ、すべての平均値が高くなっている。特に超自我阻害場面の嫌悪においては他の因子に比べてすべて得点が高くなっている。よって、仮説(1)は支持された。

- ・仮説(2) 超自我阻害場面では、見捨てられ不安の高い「恐れ型」「とらわれ型」に苦悩の情動の生起が多いであろう。

この仮説は浜井ら(2011)の研究結果より設定されたものである。4つの場面の中で有意差が見られたのは、場面2(超自我阻害場面)のみであった。同じ超自我阻害場面の場面4では、有意差が見られたのは嫌悪と劣等感のみであった。よって仮説(2)は部分的に支持された。

- ・仮説(3) 見捨てられ不安、親密性回避の2因子とも低い「安定型」はすべての場面において負の情動の生起が少ないであろう。

場面3、場面4については他の愛着スタイルよりも得点の平均値は最も低い、場面1の苦悩は3番目に高く、場面2の嫌悪においては他の愛着スタイルの中で最も高くなっている。よって、仮説(3)は部分的に支持された。

- ・仮説(4) 超自我阻害場面と比較して、自我阻害場面では無責的反应が多く生じるであろう。

場面1の無責反応は圧倒的に多く、場面3では自責反応の次に多かったが、超自我阻害場面ではほとんど無責反応は見られなかった。よって仮説(4)は支持された。

- ・仮説(5) 自我阻害場面と比較して、超自我阻害場面では「恐れ型」に自責的反应、あるいは他責的反应が抑制されて無責的反应が多くみられるであろう。

これは工藤(2006)の研究結果より設定されたものである。場面2では、自責反応が多いが、無責反応は少なく、場面4は、他責反応と自責反応が同じ値となっており、無責反応は少ない。よって仮

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

説（５）は支持されなかった。

- ・仮説（６） 「安定型」では自己表明という意味で、他群に比べて自責的反応より他責的反応が多くみられるであろう。

自我阻害場面では、場面１、場面３とも無責反応が多く、他群に比べて他責反応が多い。超自我阻害場面は、場面２では他群に比べて他責が多いが、場面４では自責が多い。よって、仮説（６）は部分的に支持された。

５． 今後の課題

（１） 愛着スタイル尺度の問題

愛着スタイルを測定するものには、半構造化された面接法による成人愛着面接と、本研究で使われた ECR-GO のような質問紙法によるものがあるが、愛着スタイルの信頼性、妥当性を高めるには、単一の質問紙のみではなく、質問紙法と面接法を組み合わせることでより確実な群分けをする必要がある。

（２） 場面設定の問題

今回は P-F スタディから４つの場面を抽出したが、同じ自我阻害場面、超自我阻害場面でも、場面によって結果が異なっていた。この他にも別の場面を設定した場合、違う結果が得られる可能性があるため、今回使用した４場面以外も検討することで、愛着スタイルの特徴をさらに捉えることができると思われる。

（３） 臨床場面への活用

恐れ型は安定型に比べて、他者との間に緊密な結びつきを築きにくく、対人関係は良好であるとはいえないので、どのような場面で情動を生起し不安定になりやすいのかをさらに明らかにすることが必要である。青年期の最も重要な発達課題のひとつであるアイデンティティの確立は、自立が前提となっている。安定型の人より良好な人間関係を築きながら自立しているのとは反対に、適切な対人関係を容易にとることができない恐れ型の人にとっては、自立、つまりはアイデンティティ確立にも少なからず影響していることが考えられるため、愛着スタイルと自立との関連性についての詳細な研究を行い、アイデンティティの拡散の防止に役立てることも今後の課題と言える。

<謝辞>

本論文を作成するにあたり、丁寧かつ熱心にご指導下さった指導教官の山口勝己先生に深く御礼申し上げます。

<引用文献>

- 浜井聡美・利根川明子・小野田亮介・上淵寿（2011）「愛着スタイルが対人葛藤事態における情動に及ぼす影響」東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅰ 62:305-314
- 林勝造、中田寛（2007）「P-F スタディ解説 2006年度版」三京房
- 数井みゆき、遠藤利彦（2005）『アタッチメント 生涯にわたる絆』 ミネルヴァ書房
- 工藤晋平（2006）「おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧—P-F スタディを用いた検討」パーソナリティ研究 第14巻 第2号 161-170
- 中尾達馬（2012）「成人のアタッチメント 愛着スタイルと行動パターン」ナカニシ出版

<参考文献>

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 Patterns of Attachment. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Assoc. 45-64
- Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. Journal of Social and Personal Relationships, 7, 147-178
- Bartholomew, K. & Horowitz, L.M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. Journal of Personality and Social Psychology, 61, 226-244.
- Bowlby, J. 1969/1982 Attachment and loss: Vol.1 Attachment. New York: Basic Books.
- Brennan, K.A., Clark, C.L., & Shaver, P.R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J.A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.), Attachment theory and close relationships. New York: The Guilford Press. Pp.46-76
- 浜井聡美・利根川明子・小野田亮介・上淵寿（2011）「愛着スタイルが対人葛藤事態における情動に及ぼす影響」東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅰ 62:305-314
- 奏一士（2007）「P-F スタディの理論と実際」 北大路書房
- 初塚真喜子（2009）「愛着理論と臨床領域—生涯にわたるアタッチメントの発達の視点から—」相愛大学 研究論集 2009 第25巻
- 林勝造、中田寛（2007）「P-F スタディ解説 2006年度版」三京房
- Hazan, C. & Shaver, P.R. 1987 Romantic love conceptualized and an attachment process. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 511-524.
- 堀洋道・吉田富二雄・宮本聡介（2011）「心理測定尺度集Ⅴ」 株式会社サイエンス社
- 片岡祥、園田直子（2008）「青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと恋人に対する依存との関連について」久留米大学心理学研究 No.7, 11-18
- 加藤和生（1998）「Bartholomew らの4分類愛着スタイル尺度（RQ）の日本語版の作成」 Journal of Cognitive Processes and Experiencing 1998/9, 7, 41-50

愛着スタイルと欲求不満場面における情動の生起
およびアグレッションの方向との関連性について

数井みゆき、遠藤利彦（2005）「アタッチメント 生涯にわたる絆」 ミネルヴァ書房

工藤晋平（2006）「おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧—P-F スタディを用いた検討」 パーソナリティ研究 第14巻 第2号 161-170

Main,M.& Solomon, J. 1990 Procedures for identifying infants as disorganized / disoriented during the Ainsworth strange situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti & E. M. Cummings (Eds.), Attachment in Preschool Years. Pp. 121-160. Chicago: University of Chicago Press.

松下姫歌、岡林睦美（2009）「青年期における愛着スタイルと母子イメージとの関連—質問紙と母子画を用いての検討—」 広島大学心理学研究 第9号

中尾達馬、加藤和生（2004）「“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討」 九州大学心理学研究 2004,Vol.5,19-27

中尾達馬・加藤和生（2004）「成人愛着スタイル尺度（ECR）の日本語版作成の試み」 心理学研究 第75巻 第2号 154

中尾達馬・加藤和生（2003）「成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？—4 カテゴリー（強制選択式、多項目式）と3 カテゴリー（多項目式）との対応性—」 九州大学心理学研究 2003,Vol.4,57-66

大迫弘江・高橋超（1994）「対人的葛藤事態における対人感情及び葛藤処理方略に及ぼす「甘え」の影響」 実験社会心理学研究, 34.44-57

蓮花のぞみ（2006）『青年期と成人期における愛着スタイルと防衛スタイルの関連性』 出典不詳

斉藤勇（1985）「対人感情と情緒の人間関係的アプローチ」 心理学研究、56, 222-278.

桜井茂男、濱口佳和、向井隆代（2003）「子どものこころ 児童心理学入門」 有斐閣アルマ

澤田丞司（2004）「心理検査の実際」 新興医学出版社